日本医史学雑誌　第66巻第3号（2020）　305–307

暴瀉病について　その1

――上原元伯『暴瀉病ニ付』――

服部　　瑛

医療法人はっとり皮膚科医院

はじめに

幕末安政5年と6年に本邦では暴瀉病（コレラ）が大流行した．富士川游は，『日本疾病史』[1]の中で，安政5年7月27日より9月23日まで，55日間に於いて，江戸中の諸寺院より，各々その取扱ひたる死亡者は，総計268,057人と報告して大災害であったことを示している．一方，児玉は「コレラ（ころり）流行，死者3万」[2]とだけ記載している．この死亡者の乖離はいかにも大きすぎる．このように，当時の事実は時を経るにつれて曖昧になっていくこともありうる．その疑問を埋めるためには，原点に戻って当時の古文書を丹念に調べなければならない．

そこで2014年より，古文書の中から幕末のコレラの実態を調べる作業を行ってきた．その成果は，「古文書と暴瀉病」[3]から始まって，コレラが全国に蔓延したことを「古文書と暴瀉病　その2」[4]に，さらに上州一地方のコレラの実態を「古文書と暴瀉病（三右衛門日記）」[5]として報告してきた．

江戸では安政5年にコレラが猖獗したが，上州では翌年安政6年に大流行した．上州前橋の医師上原元伯は，その流行に接して『暴瀉病ニ付』という小冊子を残した．それは，暴瀉病という病気を後世に残そうとする元伯の熱意を感じて感銘を受けたのだが同時に，時の隔たりを忘れて元伯と対峙・教授されている気分にさせられた．ここにその思いを伝えるべく原文をそのままに掲載させていただく．

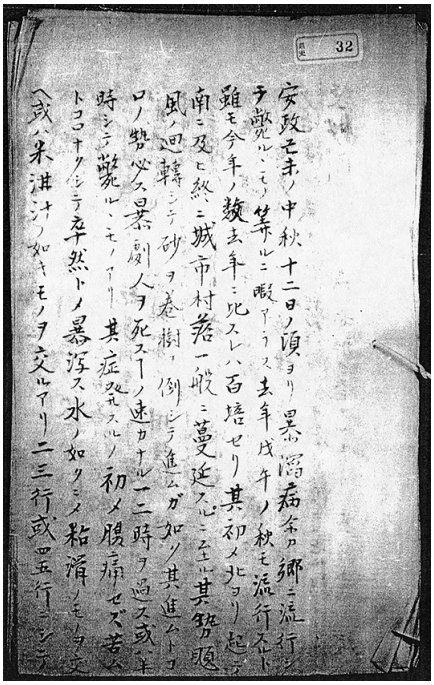

図1　本文
楷書体で丁寧に書かれている。

凡　例

一　今回翻刻したのは群馬県立文書館に収蔵されている原本（縦書き）である（図1）．

一　本文は漢字とカタカナで書かれているのでそのままの形で翻刻した．

一　読みやすくするために，文中のメ→シテ，ヒ→トモ，泻→瀉，筭→算，唖→啞，班→斑，脉→脈，冰→氷，攷→考，愈→癒，寸→時，と表記した．その他，明らかな誤字に関しては適宜修正を加えた．（例えば龔延賢→龔廷

賢，刺→刺，柱→琴柱，大供水→大洪水など）

翻　刻

安政己未ノ中秋十二日ノ頃ヨリ暴瀉病余カ郷ニ流行シテ斃ルヽモノ算ルニ暇アラス去年戊午ノ秋モ流行スルト雖モ今年ノ数去年ニ比スルハ百培セリ其初メ北ヨリ起テ南ニ及ヒ終ニ城市村落一般ニ蔓延スルニ至ル其勢颶風ノ廻轉シテ砂ヲ巻樹ヲ倒シテ進ムガ如ク其進ムトコロノ勢必ス暴劇人ヲ死ス事ノ速カナル一二時ヲ過ス或ハ半時シテ斃ルヽモノアリ其症発スルノ初メ腹痛セズ苦ムトコロナクシテ卒然トシテ暴瀉ス水ノ如クニシテ粘滑ノモノヲ交ヘ或ハ米泔汁ノ如キモノヲ交ルアリ二三行或四五行ニシテ聲啞スルモノ凶兆ナリ次テ心下物アリテ塞クガ如ク嘔吐二三回目陥リ顔色衰ヘ間モナク大ニ煩悶ヲ発呻吟擾乱シテ手足厥冷シテ冷汗出煩渇引飲水ヲ好ミ脉沈細ナルアリ或ハ微ニシテ絶セントスルアリ或ハ應ゼサルアリ轉筋甚シキモノアリ或轉筋セズ困睡状ノ如キモノアリ緩ナルモノアリ急ナルモノアリ緩ナルモノハ一二日或ハ四五日ニシテ斃ルヽモノアリ或ハ救ヒ得ルモノアリ轉筋甚シキモノハ其死速カナレハ油断スベカラス或ハ終ニ脱状ニナリテ急死スルモノアリ或ハ幸ニ危急ヲ凌テ後傷寒ノ如ク舌黄胎或黒胎乾燥冷水ヲ欲シ譫言忘語シテ大小便秘閉スルアリ或ハ赤斑ヲ発スルモアリ其餘患ヲ残スノ症一ナラス或ハ残サヽルモアリ此病霍乱ニ似テ霍乱ニモアラス實ニ一種ノ新奇病ニシテ人智ノ測リ知ルベカラザルトコロノ病ナランカ然レトモ其病性ヲ推シ其病因ヲ探リ病者ヲ塗炭ノ中ニ救ハント欲スルハ医ノ要務トスルトコロナレハ先ツ漢人ノ書ニヨリテ其病証ヲ詳ニシ其ノ主治ヲ求メント欲スレトモ彼ノ土ノ医人此病ヲ辨スル所ノ明説諒解ノ著書ヲ見ス或云痧病ナリト因テ之ヲ古人ノ書ニ考ルニ痧病ノ名明人李時珍カ本草綱目沙虫集解ニ出ルト雖トモ沙蝨毒ヲシテ今秋暴瀉ノ症ニ似ス故ニ集解ノ説ヲ擧テ其異ナル所ヲ示ス時珍曰沙病初起如傷寒頭痛壮熱嘔悪指頭微冷或腹痛悶乱須臾殺人者謂之攪腸沙云々此症暴瀉ノ症ヲ挙ケズ攪腸沙ト云ル病名ヲ古書考ルニ古書見ルトコロナクシテ始テ元人危亦林カ得効方ニ見ユ即チ乾霍乱ノ事ナリト又明人龔廷賢ガ萬病回春ニモ亦タ乾霍乱ノ事ナリトアリ又明人葉尹賢カ極急遺方李春カ衛生易簡方王璽ガ医林集要等載ルトコロノ攪腸沙ハ別ニ一種ノ病ニシテ名ハ同シケレトモ其証遥ニ異ナリテ清人郭志邃ノ云ル痧腸秘方集験ノ絞脹沙ト相同シ又コレヲ青筋ト呼フ此症ハ必ス青筋或ハ紫筋ヲ見スモノニシテ之ヲ刺テ血ヲ出ストキハ速ニ癒ルト云今郭志邃等云ルトコロノ沙病ヲ以テ時師之ヲ流行病ニ比スレトモ其症候大ニ異ナリ且右陶説トコロ今秋ノ流行病ニ及ハス獨リ霍乱沙ト云ルアリテ少ク今秋ノ病ニ似タルトコロアリト雖トモ亦大ニ異ルトコロアリ因テ今其要ヲ挙テ之ヲ示サン其説ニ曰沙本無定脈凡脈与所患之症不相應者即為痧之脈痧亦無定症或感風或感食感労感痰而以本症治之不効者皆為痧之症霍乱沙ノ條ニ曰痛而不吐瀉者名乾霍乱毒入血分宜放痧新食宜吐久食宜消食消下結宜攻痛而吐瀉者毒入血分宜刮痧不癒視有痧筋則放宜調其陰陽之気為主須知腸胃食積宜駆不宜止止則益痛苦吐瀉而後痛者此因瀉糞穢気所觸治宜略用クワ香冷飲正気然必須防食積血滞或消或攻或活血山薬茯苓不可乱施燥湿之剤倶在所禁温煖之薬未可乱投云々此症説トコロ全ク是霍乱ニシテ他ノ症候ヲ云ス何ノ據トコロアリテ今秋ノ病ヲ以テ痧病ト名付タルカ余カ解セザルトコロナリ然レトモ痧ハ熱毒ナリトアリテ専ラ寒涼ノ薬ヲ用イ温煖ノ剤ヲ忌メ痧ヲ療スルノ法ヲ以テ今秋ノ病ニ臨ムハ治法ニ於テハ敢テ霄壤ノ隔絶タルニモ非スト思ヘリ霍乱吐瀉胃冷ノ症トナシテ之ニ参附ノ剤ヲ用ルモノニ比スレハ大ニ勝レリ夫レ酷癘ノ気タル皆熱毒ニシテ寒ニ属スルモノ少シ況ヤ今秋ノ病尤モ其毒猛烈ニシテ火気焔々タルガ如ク是参附ヲ用ユルハ油ヲ淋クニ異ナラズ其勢何ソ減スル事ヲ得ンヤ余此病ニ臨コトニ其病状ヲ察スルニ皆コレ外寒裏熱ノ症ニシテ四肢厥氷ノ如シト雖トモ腹内焼ガ如シ其病勢進ミ盛ナルニ及テハ寒涼剤ヲ連服セシメ効ヲ得ル事少カラス然レトモ此病ノ発スル初メ先発散ヲ要トシ葛根桂广ノ類ヲ投シ被ヲ覆フテ汗ヲ取リ或ハ五苓加減ノ方ヲ与ヘ或ハ芩連加入ノ剤ヲ選用シ大卒湿霍乱胃熱甚シキ治法ニヨリテ薬剤ヲ与フ其症尤劇シク内熱焼カ如ク瀉下已ニ止テ氷ヲ求メ水ヲ貪ルモノニ至リテハ石膏ヲ用ヒ数々効ヲ得ル事アリ僥倖ニ病者ヲシ

テ鬼録ヲ免レシムルト雖トモ恨クハ漢人詳説明解ノ著書ナクシテ此病ノ淵源ヲ探リ得ル事能ハザルヲ如何センヤ因テ之ヲ西洋獨逸(ドイツ)國ノ医穆私(モリス)篤著ストコロノ医学韻府ト云ル書ニヨリテ此病ノ源因ヲ考窮スルニ彼國一千八百十七年本邦文化丁丑ノ年ニ當リテ初テ東印度ノ南海ノ濱ニ起リ次第ニ而諸州ニ蔓延シテ然ニ本邦ニ及フ此病彼國ニ於テ初テ兇厲ヲ現セシヨリ今ニ至ルマテ死亡スルモノ九百萬人ニ及フ其真症ニ罹テ救脱ヲ得ル者ハ僅ニ其半ニ過ズト云フ其病ノ真性ハ人々異見アリテ未タ明亮ナラス但シ感受ニ於テ不潔狭隘ノ居室悪食攝生不節或ハ大凉甚暑及ヒ気候俄ニ變スル等ニ乗シテ其害ヲ擅ニス蓋シ其蔓延スル所ノ地凍寒ノ時ニ至レハ其勢大ニ減スト雖トモ再度ニ及フ後年流行ノ時ニ及ンテ又感スル事ナシト云可ラズ窮理家ノ説ニハ此病ノ発スルハ或ハ彗星ノ近ツクニヨリ或ハ星病位置ノ模様ニヨリ或ハ火山迸発シ地球破裂陥没シテ地中ヨリ非常ノ蒸発気ヲ発スルニ由リ或ハ人ノ覚ヘザル精微ノ蒸気河川ヨリ発スルニ由ト云リ余カ愚意ヲ以テ此病ノ源因ヲ考ルニ温熱鬱蒸スル時ニアタリ彼ノ悪厲ノ毒其熱ヲ擅ニシ人ノ體中ニ入テ腸胃ヲ侵シ暴吐暴瀉ヲナシテ性命ヲ傷害スルモノハ彼ノ悪厲ノ毒湿熱鬱蒸ノ気ヲカリテ以テ人身ヲ傷ル故ナランカ其腹痛ナキモノハ必スシモ宿食停滞ヨリシテ発スルニ非ス悪厲ノ毒體中ニ入テ腸胃ヲ侵ス故ナラン是余カ寒涼ノ薬ヲ用テ温熱ノ剤ヲ忌ム所以ナリ治療ヲナスモノ能ク其理ヲ察シ其証ヲ詳ニシ焦心苦思シテ以テ其方法ヲ求メスンハアル可ラザルナリ西医ノ此病ヲ療スル第一刺絡ヲ貴ブ次ニ吐薬ヲ用ユ其他阿芙蓉液鹵砂精吉那監甘汞龍脳麝香炭酸格綸僕莫宕根香木鼈薄荷水白芷精鹿琥液鎮痛液ノ類外用ノ法ハ摩擦法蜆針法冷法熱蒸法温浴法灌注浴乾摩法発胞剤飲液法蒸溺法ノ類種々ノ方法アリテ頗ル其効験ヲ得ルモノアリト雖トモ獨リ刺絡法ニ於テハ余未タ其理ヲ解セザルトコロアリ然レトモ余彼國ノ学ニ暗クシ窮理ノ書ヲ讀ザレハ其是非ヲ糺ス事能ハスト雖トモ愚意ヲ以テ之ヲ按スルニ彼國ノ人ハ禽獣ノ肉ヲ以テ平日ノ食ニ供ス之ヲ以テ人皆多血也本邦ノ人ハ常ニ之ヲ食ハス故ニ彼國ノ人ニ比スレハ多血ノ人極テ少シ今多血ニモナキ人ヲ以テ之ヲ多血ノ人ニ比シ妄ニ刺絡法ヲ行ヒ人身中大切ナル血液ヲ減損シ一身養護ノ種ヲ失ナハシム夫レ血ハ気ニ従テ環ルモノニシテ若気壓塞シテ通セザル時ハ血コレニヨリテ凝滞シテ流レス気快暢ナル時ハ血モ亦順流シテ滞ラズ流動ノ機血ニ非スシテ気ニアリ今気ヲ和シテ血ヲ環ナス事ヲ欲セス．血液流通ノ通路ヲ刺シ多量血ヲ奪テ病ヲ療スルニ譬ハ琴柱ニ膠シテ瑟ヲ鼓スル[6]ガ如シ然レトモ彼ノ西洋人ノ平素肉食シテ多血ナルモノヲ療スルニハ益アランカ本邦ノ人ハ穀食シテ肉食セス多血ニモ非サルモノヲ療スルニハ必ス害アランカト思ヘリ摩擦数法ノ如キハ余数々試テ効アリ温浴法ノ如キ其症ニヨリテ効アラン其他ノ諸法余未タ試ミス彼國ニテモ治療ノ法ハ大卒霍乱ノ治法ニヨルモノト見ヘタリ豫メ防クノ法ハ彼國ニテハ鋭烈麦酒葡萄酒ヲ用フ余ハ雄黄朱砂硝石ノ類ヲ焚テ之ヲ防ク蓋シ千金温疫ヲ防ク法ニヨル謹テ按スルニ本邦近来種々ノ天災アリテ萬民塗炭ニ苦シム大風雨大地震大洪水之ニ加ルニ流行ノ暴瀉ヲ以テ其故他ナシ神祖以来昌平日久シク上下其徳澤ニ浴シ飽食煖衣以テ足リトセス各奢侈ニ長シテ惰慢ノ心已ニ生ス是ヲ以テ天災イヲ逢シメ憤怒ヲ見ス人々謹慎恐懼セスンバアル可カラサルナリ

謝　辞

翻刻にあたり大庭邦彦聖徳大学教授（近代史学）にご指導をいただきました．ここに深謝します．

文献と註

1）富士川游．日本疾病史．松田道雄解説．東京．東洋文庫 133．平凡社；1994．p. 227
2）小玉幸多．日本史年表・地図．東京．吉川弘文館；2011．p. 24
3）服部　瑛，服部友保．皮膚病診療　古文書と暴瀉病 2017；39(3): 330–334
4）服部　瑛，服部友保．皮膚病診療　古文書と暴瀉病 その2 2019；41(2): 182–187
5）服部　瑛．皮膚病診療　古文書と暴瀉病（三右衛門日記）その3 2020；42(3): 250–254
6）「琴柱ニ膠シテ瑟ヲ鼓スル」とは，規則にこだわって融通のきかないことのたとえである．